第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。（配点　50）

家蓄一老貍奴。(注1)(ア)将誕子矣。(a)一女童誤触之、而堕日夕鳴(注2)鳴然。会有餽両小貍奴者。其始、蓋漠然(注3)不相能也。老貍奴者、従而撫之、徬徨(注4)焉、躑躅焉。臥則擁之、行則翊之。舐其毳(注5)而譲之食。両小貍奴者、亦久而相忘也。稍即之、遂承(1)其乳出也。(b)吁、亦異哉。

A

焉。(イ)自是欣然(注6)以為良己之母。老貍奴者、亦居(注7)然以為良己

昔、漢明(注8)徳馬后無子。顕(注9)宗取他人子、命養之曰、「人子何必親生。但恨愛之不至耳。」(c)后遂尽心撫育、而章帝亦恩(注10)性天至。母子慈孝、始終無(注11)繊芥之間。貍奴之事、(2)適有契焉。(d)然

B

C 則チ世之為ニ人親与レ子、而有ニ不慈不孝者一、豈独愧ニ于古人一。亦タ愧ハヅルニ此ノ異類ニ(e)一已。

（程敏政『篁墩文集』による）

（注）

1 貍奴――猫。
2 嗚嗚然――嘆き悲しんで鳴くさま。
3 漠然――無関心なさま。
4 徬徨焉、躑躅焉――うろうろしたり足踏みをしたりして、落ち着かないさま。
5 氄――うぶ毛。
6 欣然――よろこぶさま。
7 居然――やすらかなさま。
8 明徳馬后――後漢の第二代明帝（顕宗）の皇后。第三代章帝の養母。
9 顕宗取ニ他人子一、命養レ之――顕宗が他の妃の子を引き取って、明徳馬后に養育を託したことをいう。
10 恩性天至――親に対する愛情が、自然にそなわっていること。
11 無ニ纖芥之間一――わずかな隔たりさえないこと。

問1　傍線部(1)「承」・(2)「適」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30 。

(1)「承」 29

① 授けた
② 認識した
③ 納得した
④ 差し出した
⑤ 受け入れた

(2)「適」 30

① ゆくゆく
② わずかに
③ ちょうど
④ ほとんど
⑤ かならず

問2　二重傍線部(ア)「将」・(イ)「自」と同じ読み方をするものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 31 ・ 32 。

(ア)「将」 31

① 当
② 盍
③ 応
④ 且
⑤ 須

(イ)「自」 32

① 如
② 以
③ 毎
④ 従
⑤ 雖

問3 波線部(a)「矣」・(b)「也」・(c)「耳」・(d)「焉」・(e)「已」の説明の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① (a)「矣」は「かな」と読み、詠嘆の意味を添え、(b)「也」は「なり」と読み、断定の意味を添える。

② (a)「矣」は「かな」と読み、感動の意味を添え、(e)「已」は「のみ」と読み、限定の意味を添える。

③ (b)「也」は「なり」と読み、伝聞の意味を添え、(c)「耳」は「のみ」と読み、限定の意味を添える。

④ (c)「耳」は「のみ」と読み、限定の意味を添え、(d)「焉」は文末の置き字で、断定の意味を添える。

⑤ (d)「焉」は文末の置き字で、意志の意味を添え、(e)「已」は「のみ」と読み、限定の意味を添える。

問4　傍線部A「吁、亦 異 哉」とあるが、筆者がそのように述べる理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① 子猫たちと出会った時は「嗚嗚然」としていた老猫が、「欣然」と子猫たちと戯れる姿を見せるようになったため。
② 互いに「漠然」として親子であることを忘れていた猫たちが、最後には「居然」と本来の関係をとりもどしたため。
③ 老猫と出会った初めは「漠然」としていた子猫たちが、ついには「欣然」と老猫のことを慕うようになったため。
④ 子猫たちが「居然」として老猫になつき、老猫も「嗚嗚然」たる深い悲しみを乗り越えることができたため。
⑤ 子猫たちが「欣然」と戯れる一方で、老猫は「居然」たるさまを装いながらも深い悲しみを隠しきれずにいるため。

問5 傍線部B「人子何必親生」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 子というものは、いつまでも親元にいるべきではない。
② 子というものは、必ずしも親の思い通りにはならない。
③ 子というものは、どのようにして育ててゆけば良いのか。
④ 子というものは、自分で産んだかどうかが大事なのではない。
⑤ 子というものは、いつまでも親の気を引きたいものだ。

問6　傍線部C「世之為二人親与レ子、而有二不慈不孝者一、豈独愧二于古人一」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 世の人親と子との為にして、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人のみを愧づかしめんや
② 世の人親の子に与ふと為すも、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人に愧づるのみならんや
③ 世の人親の子に与ふるが為に、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人のみを愧づかしめんや
④ 世の人親と子との為にするも、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人のみを愧づかしめんや
⑤ 世の人親と子と為りて、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人に愧づるのみならんや

問7　この文章全体から読み取れる筆者の考えの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37 。

① 猫の親子でも家族の危機を乗り越え、たくましく生きている。悲嘆のあまり人間本来の姿を見失った親子も、古人が言うように互いの愛情によって立ち直ると信じたいものだ。

② 血のつながらない猫同士でさえ実の親子ほどに強く結ばれることがある。人でありながら互いに愛情を抱きあえない親子がいることは、古人はおろか猫の例にも及ばないほど嘆かわしいものだ。

③ 子猫たちとの心あたたまる交流によっても、ついに老猫の悲しみは癒やされることはなかった。我が子を思う親の愛情は、古人が示したように何にもたとえようがないほど深いものだ。

④ 老猫は子猫たちを憐(あわ)れんで献身的に養育し、子猫たちも心から老猫になつく。その一方で、古人のように素直になれず、愛情がすれ違う昨今の親子を見ると、誠にいたたまれなくなるものだ。

⑤ もらわれてきた子猫でさえ老猫に対して孝心を抱く。これに反して、成長しても肉親の愛情に恩義を感じない子がいることは、古人に顔向けできないほど恥ずかしいものだ。